

平成 29 年 7 月 19 日（水） 15:00 発表

問合せ：大阪市鶴見区緑地公園 2-136
（公財）国際花と緑の博覧会記念協会
企画事業部第 2 課長：金森 幹仁

<http://www.expo-cosmos.or.jp>

090-6913-1445（7 月 19 日のみ）

06-6915-4513

2017 年（第 25 回）コスモス国際賞の受賞者は

ジェーン・グドール・インスティテュート創設者
ジェーン・グドール博士

野生チンパンジーの生態の解明を通じて人間の本性を描き出した

公益財団法人国際花と緑の博覧会記念協会（会長：今井敬）は、7 月 19 日開催の理事会で、コスモス国際賞委員会（委員長：岸本忠三）、同選考専門委員会（委員長：林良博）からの報告を受け、ジェーン・グドール・インスティテュート創設者、国連平和大使ジェーン・グドール博士（83 歳）を 2017 年（第 25 回）コスモス国際賞の受賞者に決定した。

ジェーン・グドール博士は、タンザニアのゴンベでの野生チンパンジーの研究を 1960 年に開始して今日に到る。野生チンパンジーの生態の解明を通じて人間の本性を描き出した。博士の貢献は以下の 3 点に要約できる。第 1 に、野生チンパンジーの生態を世界で初めて解明した。第 2 に、「長期継続野外研究」という野外の動物研究のパラダイムを創出した。第 3 に、「ルーツアンドシューツ」（R&S）という環境教育プログラムを創案し実行している。博士の長期的な視点に立った野生チンパンジー研究は、地球的視点における生命体相互の関係性や統合性の理解を促進するうえで、大きな貢献をしている。



写真画像ファイルは次の URL にあります。

<http://www.expo-cosmos.or.jp/2017.jpg>

1. 選考の経緯

平成 29 年 5 月から 6 月までコスモス国際賞選考専門委員会を 3 回開催し、150 件を対象に審査した上、6 月 19 日開催のコスモス国際賞委員会で受賞候補者を決定した。

7 月 19 日開催の国際花と緑の博覧会記念協会理事会において、コスモス国際賞委員会からの報告を受け、受賞者を決定した。

<2017 年コスモス国際賞の選考対象>

2015 年分 45 件、2016 年 48 件、2017 年分 57 件、 合計 150 件 (30 カ国)

<国別内訳>

アメリカ(41)、日本(34)、イギリス(14)、オーストラリア(7)、フランス(7)、ドイツ(5)、カナダ(4)、ブラジル(4)、インド(3)、オランダ(3)、スウェーデン(3)、マレーシア(3)、ロシア(2)、スイス(2)、南アフリカ(2)、ブルキナファソ(2)、アルゼンチン(1)、ウルグアイ(1)、エクアドル(1)、エジプト(1)、ケニア(1)、スペイン(1)、チェコ(1)、中国(香港)(1)、チリ(1)、トルコ(1)、ノルウェー(1)、パラオ(1)、フィンランド(1)、ベルギー(1)

2. その他

(1) 授賞式

平成 29 年 11 月 6 日 (月)、いずみホール (大阪市中央区) で行う。

(2) その他

受賞者には賞状、賞牌および副賞 (4,000 万円) を贈呈する。

添付資料

- ・ 受賞者の概要
- ・ 授賞理由
- ・ 受賞者のコメント
- ・ その他 (歴代受賞者、コスモス国際賞委員会委員・選考専門委員会委員名簿)

受賞者の概要

氏名 ジェーン・グドール Jane Goodall

生年月日 1934年4月3日(83歳) 英国・ロンドン生まれ

国籍 英国

役職 ジェーン・グドール・インスティテュート (Jane Goodall Institute) 創設者
国連平和大使

学歴

1950年 英国・School Certificate (London) with Matriculation Exemption
1952年 英国・Higher Certificate (London)
1962年 英国・ケンブリッジ大学にて博士号取得のため、ロバート・ハインド教授の指導を受ける(動物行動学)
1966年 英国・ケンブリッジ大学博士号取得(動物行動学)

職歴

1971年-1975年 米国・スタンフォード大学客員教授(心理学、人間生物学)
1973年-現在 タンザニア・ダル・エス・サラーム大学名誉客員教授
1974年-現在 リーキー財団理事
1976年-現在 ジェーン・グドール・インスティテュート理事
1987年-1988年 米国・タフツ大学招聘教授(環境学部)
1990年 米国・クリーブランド自然史博物館研究員
1990年 米国・南カリフォルニア大学特別招聘教授
(文化人類学、作業療法)
1996年-2002年 米国・コーネル大学アンドリュー・ディクソン・ホワイト講座
特別客員教授

主な受賞歴

- 1990 年 京都賞（生物科学（行動・生態・環境））
- 2002 年 The Huxley Memorial Medal, Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland（ハックスリー賞）
- 2003 年 Benjamin Franklin Medal in Life Science, USA
（米国・ベンジャミン・フランクリン・メダル）
- 2004 年 Dame of the British Empire, presented by HRH Prince Charles, UK
（大英帝国勲章）
- 2008 年 L.S.B Leakey Foundation Prize for Multidisciplinary Research
on Ape and Human Evolution (Leakey Prize), USA（リーキー賞）
- 2016 年 Life-time achievement award of International Primatological Society
（国際霊長類学会生涯功労賞）

主な論文

- 1962 Nest building in a group of free-ranging chimpanzees. *Ann. N.Y. Acad. Sci.* 102: 455-467.
- 1963 Feeding behaviour of wild chimpanzees: a preliminary report. *Symp. Zool. Soc. Lond.* 10: 39-48.
- 1963 My life with the wild chimpanzees. *National Geographic* 124 (2):272-308.
- 1964 Tool-using and aimed throwing in a community of free-living chimpanzees. *Nature*. 201: 1264-1266.
- 1965 Chimpanzees of the Gombe Stream Reserve. In: I. DeVore (Ed). *Primate Behaviour*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- 1965 New discoveries among Africa's chimpanzees. *National Geographic* 128 (6): 802-831.
- 1968 Behaviour of free-living chimpanzees of the Gombe Stream Area. In: J.M. Cullen and C.G. Beer (Eds). *Anim. Behav. Monog. Vol. 1, Part 3*. London: Bailliere, Tindall, and Casell. pp. 165-311.
- 1975 Chimpanzees of Gombe National Park: 13 years of research. In: I. Eibesfeldt (Ed). *Hominisation und Verhalten*. Stuttgart: Gustav Fischer Verlag. pp. 74-136.
- 1977 Infant-killing and cannibalism in free-living chimpanzees. In: *Folia Primatol.* 28: 59-282.
- 1983 (with T. Nishida, R.W. Wrangham, and S. Uehara.) Local differences in plant-feeding habits of chimpanzees between the Mahale Mountains and Gombe National Park, Tanzania. *J. Human Evol.* 12: 467-480.
- 1984 The nature of the mother-child bond and the influence of family on the social development of free-living chimpanzees. In: N. Kobayashi and T.B. Brazelton (Eds). *The Growing Child in Family and Society*. Tokyo: University of Tokyo Press. pp. 47-66.
- 1989 (with R.W. Wrangham). Chimpanzee use of medicinal leaves. In P. Heltne and L. Marquardt (Eds) *Understanding Chimpanzees*, pp. 22-37. Cambridge: Harvard University Press.
- 1999 (with A. Whiten, McGew, W.C., Nishida, T., Reynolds, V., Sugiyama, Y. Tutin, C.E.G., Wrangham, R.W., Boesch, C.) Cultures in chimpanzees. *Nature* 399, 682-5.
- 2001 (with Hill, K., Goodall, J, Pusey, A., Williams, J., Boesch, C., Boesch, H., & Wrangham, R.W.) Chimpanzee mortality in the wild. *Journal of Human Evolution.* 40:437-450.
- 2007 (with M Emery Thompson, JH Jones, AE Pusey, S Brewer-Marsden, D Marsden, T Matsuzawa, T Nishida, V Reynolds, Y Sugiyama, RW Wrangham). Aging and fertility patterns in wild chimpanzees provide insights into the evolution of menopause.. *Current biology: CB* 17: 2150-6
- 2014 Wilson et al Lethal aggression in Pan is better explained by adaptive strategies than human impacts, G Hohmann, N Itoh, K Koops, JN Lloyd, T Matsuzawa... - *Nature*

主な出版物

書籍

1971 *In the Shadow of Man*. Boston: Houghton Mifflin; London: Collins.

Published in 48 languages.

邦訳は「森の隣人」朝日新聞社、48か国語に翻訳

1986 *The Chimpanzees of Gombe: Patterns of Behavior*. Boston: Bellknap Press of the Harvard University Press. Published also in Japanese and Russian.

邦訳は「野生チンパンジーの世界」ミネルヴァ書房

1990 *Through a Window: My Thirty Years with the Chimpanzees of Gombe*. London: Weidenfeld & Nicolson; Boston: Houghton Mifflin.

Translated into more than 15 languages.

邦訳は、「心の窓：チンパンジーとの三〇年」どうぶつ社、15か国語に翻訳

1999 *Reason For Hope: A Spiritual Journey (with Phillip Berman)*. New York: Warner Books, Inc. Translated into more than 13 languages.

邦訳は「森の旅人」角川書店、13か国語に翻訳

子供向け書籍

1988 *My Life with the Chimpanzees*. New York: Byron Preiss Visual Publications, Inc. Translated into French, Japanese and Chinese.

Parenting's Reading-Magic Award for "Outstanding Book for Children," 1989.

邦訳は「チンパンジーの森へ -ジェーン・グドール自伝-」地人書館

1989 *The Chimpanzee Family Book*. Saxonville, MA: Picture Book Studio; Munich: Neugebauer Press; London: Picture Book Studio.

Translated into more than 15 languages, including Japanese and Kiswahili.

The UNICEF Award for the best children's book of 1989.

Austrian state prize for best children's book of 1990. (チンパンジー (子供向け写真集))

1994 *With Love* (illustrated by Alan Marks). New York / London: North-South Books.

Translated into German, French, Italian, and Japanese.

邦訳は「森にうまれた愛の物語：野生チンパンジーのなかまたち」講談社

授賞理由

ジェーン・グドール博士は、タンザニアのゴンベでの野生チンパンジーの研究を 1960 年に開始して今日に到る。野生チンパンジーの生態の解明を通じて人間の本性を描き出した。

グドール博士は、「進化の隣人」である野生チンパンジーを深く理解し、人間の本性の進化的起源を明示した。別の言い方をすると、地球的視点における生命体相互の関係性や統合性の理解を促進するうえで、長期的な視点に立った博士の野生チンパンジー研究こそが、博士の研究の真の貢献といえるだろう。コスモス国際賞が称揚する学問のあり方を起点に考えると、博士の貢献は、大局的にみれば、以下の 3 点に要約できる。

第 1 に、野生チンパンジーの生態を世界で初めて解明した。シロアリ釣りに代表される道具の使用や制作を発見した。肉食や、食物の分配を報告した。また長期にわたる母子のきずなの重要性を発見した。さらに近年の業績としては、アフリカの他の調査基地と連携して、野生チンパンジーの全体像を描き出すことに貢献した。具体的には、ゴンベだけでなくマハレやボソソウなど地域ごとにことなる道具の文化が存在すること、チンパンジーの寿命（約 50 年）や出産率（約 5 年に 1 度）といった人口学的変数の算出、さらには仲間殺しの頻度（153 例のチンパンジーによるチンパンジー殺害例）などである。人間とは何か。人間の本性とその進化的起源について、野生チンパンジー研究から実証的に示したといえる。

第 2 に、「長期継続野外研究」という野外の動物研究のパラダイムを創出した。個体識別した行動学的観察にもとづく長期野外研究である。その手法は、さらにゾウやキリンやライオンなど、その他の絶滅危惧の大型動物の研究でも標準的な研究手法になっている。さらに、研究だけにとどめずに植林事業や環境教育活動といった実践活動と結合した。チンパンジーが住む森を保全するための植林事業や、地域住民の環境教育活動「タカリ」の活動をおこなった。つまり、研究を保全の実践活動と結合した点で、たんなる長期野外研究とは違うといえる。

第 3 に、「ルーツアンドシューツ」(R&S) という環境教育プログラムを創案し実行した。現在、世界 99 か国で、約 15 万団体が活動している。若い人々が自発的に取り組む環境教育運動という特徴がある。人間・動物・環境という 3 つのキーワードからその草根の活動を展開している。詳細は以下のサイトで検証されたい。<https://www.rootsandshoots.org/> 博士の環境教育活動に対する高い評価があり、「国連平和大使」として選出された。ルーツアンドシューツは 1991 年に始まって四半世紀を迎える。コスモス国際賞の掲げる「自然界における生命のさまざまなありよう、およびそれらと人間のかかわり、自然の一部としての人間」という研究を、若い人々自身が運営実行する環境教育運動へと昇華させた試みだといえるだろう。科学や研究が、もし実践を伴わないとしたら、それは無に等しいといえるだろう。博士は、今年 83 歳になる。そうした高齢にもかかわらず、今も、世界中をとびまわっている。毎年約 300 回の講演をする。

このように、博士の長期的な視点に立った野生チンパンジー研究は、地球的視点における生命体相互の関係性や統合性の理解を促進するうえで、大きな貢献をしている。また、若い人々自身が運営実行する環境教育プログラムを創案し実行するなど、グドール博士の功績は、「自然と人間との共生」を理念とするコスモス国際賞の授賞にふさわしいと評価した。

受賞者コメント

このたびは 2017 年コスモス国際賞を授けていただきました。とても光栄に存じます。選考委員の先生方に心より御礼を申し上げます。私をお選びいただいた理由は、おそらくこれから述べるようなものだと思います。私は、1960 年にタンザニアのゴンベ国立公園でチンパンジー (Pan troglodytes schweinfurthi) の研究を始めました。現在は、世界中から集まった研究者たちがチームを組んで、この研究を続けています。私は 1962 年にケンブリッジ大学に博士学位論文を書くために行きました。当時そこでは、人間だけが個性や感情や心を持ち、問題を解決する能力を持っている、というのが通説でした。しかし、私の調査によって、野生チンパンジーのさまざまな実態が解明されました。まず、チンパンジーは複雑な社会生活を送り、家族と長期にわたる絆を築き、人間と同じように、幸せ、悲しみ、怒り、嘆きなどの感情を持っています。チンパンジーは道具を使用し制作することもわかりました。こういった道具の能力は人間だけが持つものと当時は考えられていました。またチンパンジーは残虐な行為—原始的な戦争のようなもの—も行いますが、その一方で、同情や利他行動も示します。その後、こうした私の発見は、アフリカ全域のフィールド調査の現場においても追認され、また飼育下にあるチンパンジーにおいても立証されてきました。

1986 年に、私の研究は「The Chimpanzees of Gombe: Patterns of Behaviour (邦題「野生チンパンジーの世界」)」という本にまとめられ出版されました。これをきっかけに、「Understanding Chimpanzees」という会議が(シカゴで)開催され、アフリカ中の野外調査拠点から研究者が結集し情報を共有しました。まさにこの会議の場で、野生チンパンジーが置かれている状況が、自分が認識していたものよりもはるかに劣悪であることに気付きました。そして、私は野生チンパンジーの保全活動に身を投じる決心をしたのです。そしてすぐに、地域社会と連携して活動することこそ重要だと理解しました。そこで 1994 年に、ジェーン・グドール・インスティテュート(JGI)は、タカリ(TACARE)プログラムに着手したのです。地域の人々が私たちの研究に参加する機会を増やし、彼らの生活を向上させ、貧困を緩和する取り組みです。今では地域の人々は、私たちのパートナーとして、一緒に保全活動を進めています。現在、JGI は、アフリカの他の 6 つの国々で、チンパンジー研究と地域に根差した保全活動を行っています。

新しい世代の人々が、これまでよりさらにもっと環境問題に深く関わるようにならないと、いくら上記のような活動してもすべて無駄になってしまうでしょう。そこで、1991 年に、環境教育ならびに人道教育を行う JGI のプログラム「ルーツ&シューツ」を立ち上げました。「ルーツ&シューツ」は幼稚園児から大学生に至るまで、子どもや若者を対象としたプログラムです。各グループはそれぞれ、人間、動物、環境の3つのどれかをキーワードにして、それらを助け守ることをテーマとしたプロジェクトに取り組んでいます。現在、「ルーツ&シューツ」は、99 カ国で約 15 万団体が活動を展開しています。国や文化や宗教の異なる人々の壁、そして人類と自然界を隔てる壁を打ち壊すための取り組みを私たちは進めています。

今も 1 年のうち約 300 日間、世界中を飛び回っています。JGI のプログラムの資金を募り、野生チンパンジーや彼らの森林生息地を保全し、人間に飼育されているチンパンジーの状況を改善し、「ルーツ&シューツ」プログラムを拡大し、ひいては私たち人類が地球に与えている甚大な被害について、人々の意識を啓発するための活動を行っています。貧困緩和の必要に関していえば、限りある資源の持続不可能な利用の抑制も目指しています。持続不可能な利用は、公害、生息地の破壊、生物多様性の喪失—さらには気候変動にもつながっています。こうした重い課題に直面しつつも、私たちにはまだ「希望」を持てる理由がいくつかあります。今ならまだ間に合います。チンパンジーを含めたあらゆる動物、環境、子どもたちの未来のために、事態を好転させるのに、遅すぎるということはありません。この「希望」がなければ、私たちは無気力に陥り、何もできなくなってしまうでしょう。この「希望」を持てる理由を、皆さんと分かち合いたいと思います。

ジェーン・グドール

コスモス国際賞歴代受賞者（肩書きは受賞時）

「コスモス国際賞」は、「自然と人間との共生」という理念の発展に貢献し、「地球生命学」とも呼ぶべき、地球的視点における生命相互の関係性、統合性の本質を解明しようとする研究活動や学術活動を顕彰するために設けられた国際賞です。

1993年（第1回）受賞者

ギリアン・プランス卿

イギリス 王立キュー植物園園長

南米アマゾン地域を中心とする熱帯植物研究の権威。地球全域の植生を統一データ化する「地球植物誌計画」を提唱、世界の植物学者とネットワークを組んで実現に努力した。

1994年（第2回）受賞者

ジャック・フランソワ・パロー博士（物故者）

フランス パリ国立自然史博物館教授

太平洋の島々の自然と人々の暮らしについて民族生物学的な調査、研究を行い、これをもとに人間と食糧をテーマに、全地球的な視点からユニークな考察を発表した。

1995年（第3回）受賞者

吉良龍夫博士（物故者）

日本 大阪市立大学名誉教授

光合成による植物の有機物生産の定量的研究をもとに、生態学の新分野となる生産生態学を確立。東南アジア地域の熱帯林生態系の研究で指導的な役割を努めた。

1996年（第4回）受賞者

ジョージ・ピールズ・シャラー博士

アメリカ 野生生物保護協会科学部長

40年にわたり、世界各地で様々な野生生物の生態と行動を研究。『マウンテンゴリラ・生態と行動』『ラストパンダ』など数多くの著書で全世界に野生動物の実態を知らせた。

1997年（第5回）受賞者

リチャード・ドーキンス博士

イギリス オックスフォード大学教授

1976年に出版された著書『利己的な遺伝子』で、生物学の常識を覆す大胆な仮説を発表。その後も、生物の進化について新しい見解を提示して、学会に論争を起こしている。

1998年（第6回）受賞者

ジャレド・メイスン・ダイアモンド博士

アメリカ カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授

医学部教授として生理学を研究する一方、40年にわたりニューギニアの熱帯調査を行い、これらを基に人類の歴史的な発展を再構成したユニークな考察を発表した。

1999年（第7回）受賞者

呉征鎰（ウー・チェン・イー）博士（物故者）

中国 中国科学院昆明植物研究所教授・名誉所長

中国を代表する植物学者。中国を拠点に東アジア地域の植物の調査研究に取り組み、中国全土の植物の種の多様性を網羅する『中国植物誌』の編集を主導、刊行を実現させた。

2000年（第8回）受賞者

デービッド・アッテンボロー卿

イギリス 映像プロデューサー、自然誌学者

野生生物のドキュメント映像のパイオニア。BBC時代から退社後を含め、約半世紀にわたって、地球上の野生の動植物の生の姿を、優れた映像で全世界に伝えた。

2001年（第9回）受賞者

アン・ウィストン・スパーン教授

アメリカ マサチューセッツ工科大学教授

都市と自然は対立するものでなく、周辺の地域環境と調和し、その一部として存在する都市の構築が可能であるとし、都市が自然との調和をはかりながら発展する方策を示した。

2002年（第10回）受賞者

チャールズ・ダーウィン研究所

エクアドル・ガラパゴス諸島

1964年設立の国際的NGO・NPO組織。南米エクアドル領のガラパゴス諸島で、ゾウガメ、イグアナなど、特異な固有生物の調査研究と保護に当たっている。

2003年（第11回）受賞者

ピーター・ハミルトン・レーブン博士

アメリカ ミズーリ植物園園長

米国を代表する植物学者で、地球の生物多様性の保全を提唱した国際的な先駆者。常に地球的な視点で生命の問題を考え、学術と実践両面で自然と人間との共生に貢献した。

2004年（第12回）受賞者

フーリャ・カラビアス・リジョ教授

メキシコ メキシコ国立自治大学教授

途上国の立場から全地球的な環境問題を考え、フィールドワークとさまざまな学問分野の研究を統合したプログラムを実施し、異なる条件下での困難な課題に優れた成果を挙げた。

2005年（第13回）受賞者

ダニエル・ポーリー博士

カナダ ブリティッシュ・コロンビア大学水産資源研究所所長・教授

漁業と海洋生態系の関連を包括的に研究。海洋生態系保全と水産資源の持続的利用を可能にする科学的モデル開発など、海洋生態系と資源研究の分野で優れた業績を収めた。

2006年（第14回）受賞者

ラマン・スクマール博士

インド インド科学研究所 生態学センター・教授

ゾウと人間との生態関係や軋轢への対処をテーマとした研究から、生物多様性保護と自然環境の保全全般にわたる多くの提言を行い、かつ実行し、野生生物と人間との共存という分野での先駆的な取り組みを行なった。

2007年（第15回）受賞者

ジョージナ・メアリー・メイス博士

イギリス ロンドン大学自然環境調査会議体群生物学研究センター所長兼教授

絶滅危惧種を特定・分類し、科学的な基準を作成することにおいて指導的役割を果たし、種の保全、生物多様性保全に大きく貢献する取り組みを行なった。

2008年（第16回）受賞者

ファン・グエン・ホン博士

ベトナム ハノイ教育大学名誉教授

戦争や乱開発がマングローブの生態系に壊滅的な打撃を与えたベトナムで、マングローブの科学的、包括的な調査・研究を行い、マングローブ林の再生に大きな成果をあげた。

2009年（第17回）受賞者

グレッチェン・カーラ・デイリー博士

アメリカ スタンフォード大学教授

人類社会が依存する生物多様性のもつ「生態系サービス」の価値を包括的に捉えて、「国連ミレニアム生態系評価」など国際的な取り組みに貢献するとともに、生態学・経済学を統合し、自然資本の持続的な利用のために「自然資本プロジェクト」を実施する等大きな役割を果たした。

2010年（第18回）受賞者

エステラ・ベルグレ・レオポルド博士

アメリカ ワシントン大学名誉教授

父アルド・レオポルド氏（1887-1948）が提唱した「土地倫理」を継承・追及するとともに、アメリカ各地においてこの考えを広げるなど、多大な功績を残した。

2011年（第19回）受賞者

海洋生物センサス科学推進委員会

事務局：アメリカ ワシントンDC

海洋生物の多様性、分布、生息数についての過去から現在にわたる変化を調査・解析し、そのデータを海洋生物地理学情報システムという統合的データベースに集積することにより、海洋生物の将来を予測するプロジェクト「海洋生物センサス」を主導した。

2012年（第20回）受賞者

エドワード・オズボーン・ウィルソン博士

アメリカ ハーバード大学名誉教授

アリの自然史および行動生物学の研究分野で卓越した研究業績をあげ、その科学的知見を活かして人間の起源、人間の本性、人間の相互作用の研究に努めたほか、生物多様性保全や環境教育を推進する実践家として活動した。

2013年（第21回）受賞者

ロバート・トリート・ペイン博士（物故者）

アメリカ ワシントン大学名誉教授

生物群集の安定的な維持に捕食者の存在が不可欠なことを、明快な野外実験によって示し、キーストーン種という概念を提唱した。一連の研究は、生物多様性を扱う群集生態学の分野に新しい視点をもたらし、生態学はもとより保全生物学や、一般の人々の生物多様性への理解に大きな影響を与えた。

2014年（第22回）受賞者

フィリップ・デスコラ博士

フランス コレージュ・ド・フランス教授

人類学者として、南米アマゾンに住む先住民アシュアールの人々の自然観とそこの自然と関わる諸活動に焦点を当て、これらの綿密な調査から哲学的な思想へと論を進め、自然と文化を統合的に捉える「自然の人類学」を提唱した。

2015年（第23回）受賞者

ヨハン・ロックストローム博士

スウェーデン スtockホルム・レジリエンス・センター所長

人類が地球システムに与えている圧力が飽和状態に達した時に不可逆的で大きな変化が起こりうる
し、プラネタリーバウンダリーを把握することで、壊滅的な変化を回避でき、その限界がどこにある
かを知ることが重要であるという考え方を示した。

2016年（第24回）受賞者

岩槻 邦男博士

日本 東京大学名誉教授

生物多様性を探求し、伝統的な手法に加えて、分子系統的な手法も取り入れつつ、包括的かつ多面的
に植物系統分類学を発展させた。また、系統分類学を含めた多様性生物学による生物の統合的理解の
重要性を説き、そのような理解が生物の豊かさや自然との共生を支える重要な原理であることを明らか
にした。

2017年コスモス国際賞 賞委員会委員および顧問
International Cosmos Prize Committee

2017.4 (五十音順)

役職 Position	氏名 Name	専門分野 Specialty	職名 Official Title
委員長 Chairperson	岸本 忠三 Dr. Tadamitsu Kishimoto	免疫学 Immunology	大阪大学免疫学フロンティア研究センター 特任教授 Project Professor, Immunology Frontier Research Center, Osaka University
副委員長 Vice- Chairperson	尾池 和夫 Dr. Kazuo Oike	地震学 Seismology	京都造形芸術大学 学長 President, Kyoto University of Art And Design
委員 Member	浅島 誠 Dr. Makoto Asashima	発生生物学 Developmental biology	東京理科大学 副学長 Vice-President, Tokyo University of Science
委員 Member	池内 了 Dr. Satoru Ikeuchi	天文学 Astronomy	総合研究大学院大学 名誉教授 Professor Emeritus, The Graduate University for Advanced Studies
委員 Member	磯貝 彰 Dr. Akira Isogai	農芸化学 Agricultural Chemistry	奈良先端科学技術大学院大学 名誉教授 Professor Emeritus, Nara Institute of Science and Technology
委員 Member	小山 修三 Dr. Shuzo Koyama	文化人類学 Anthropology	一般財団法人千里文化財団 理事長 President, The Senri Foundation
委員 Member	佐々木 恵彦 Dr. Satohiko Sasaki	森林資源科学 Forest science and resource	公益財団法人国際緑化推進センター理事長 President, Japan International Forestry Promotion and Cooperation Center
委員 Member	武内 和彦 Dr. Kazuhiko Takeuchi	緑地環境科学 Landscape and environmental science	東京大学サステイナビリティ学連携研究機構長・特任教授 Director and Project Professor, Integrated Research System for Sustainability Science (IR3S), University of Tokyo
委員 Member	西澤 直子 Dr. Naoko Nishizawa	植物分子生物学 Plant molecular biology	石川県立大学生物資源工学研究所 教授 Professor, Research Institute for Bioresources and Biotechnology, Ishikawa Prefectural University
委員 Member (選考委員長兼務)	林 良博 Dr. Yoshihiro Hayashi	動物資源科学 Animal science and resource	独立行政法人 国立科学博物館 館長 Director General, National Museum of Nature and Science
委員 Member	鷺谷 いづみ Dr. Izumi Washitani	生態学・保全生態学 Ecology, Conservation Ecology	中央大学理工学部 教授 Professor, Faculty of Science and Engineering, Chuo University

役職 Position	氏名 Name	専門分野 Specialty	職名 Official Title
顧問 Advisor	有馬 朗人 Dr. Akito Arima	原子核物理学 Nuclear physics	学校法人根津育英会武蔵学園 学園長 Chancellor, Musashi Academy of the Nezu Foundation
顧問 Advisor	中村 桂子 Dr. Keiko Nakamura	生命科学 生命誌 Biohistory	JT 生命誌研究館 館長 Director General, Biohistory Research Hall

2017年コスモス国際賞 選考専門委員会委員
International Cosmos Prize Screening Committee of Experts

2017.4 (五十音順)

役 職 Position	氏 名 Name	専門分野 Specialty	職 名 Official Title
委員長 Chairperson	林 良博 Dr. Yoshihiro Hayashi	動物資源科学 Animal science and resource	独立行政法人 国立科学博物館 館長 Director General, National Museum of Nature and Science
委員 Member	秋道 智彌 Dr. Tomoya Akimichi	生態人類学 Ecological Anthropology, Ethno-Biology	山梨県立富士山世界遺産センター 所長 Director General, Fujisan World Heritage Center
委員 Member	池邊 このみ Dr. Konomi Ikebe	緑地環境科学 Landscape and Environmental Science	千葉大学大学院園芸学研究科 教授 Professor, Graduate School Environmental Science and Landscape, Chiba University
委員 Member	モンテ ・カセム Dr. Monte Cassim	環境科学 Environmental Science	立命館大学 名誉教授 Professor Emeritus, Ritsumeikan University
委員 Member	ケビン ・ショート Dr. Kevin Short	文化人類学 Anthropology	東京情報大学環境情報学科 教授 Professor, Department of Environmental Information, Tokyo University of Information Sciences
委員 Member	中静 透 Dr. Toru Nakashizuka	森林生態学 Forest ecology	総合地球環境学研究所 特任教授 Specially Appointed Professor, Research Institute for Humanity and Nature
委員 Member	野家 啓一 Mr. Keiichi Noe	科学哲学 Philosophy of Science	東北大学名誉教授・総長特命教授 President-appointed Extraordinary Professor, Tohoku University
委員 Member	松沢 哲郎 Dr. Tetsuro Matsuzawa	比較認知科学 Comparative Cognitive Science	京都大学高等研究院 特別教授 Distinguished Professor, Kyoto University Institute for Advanced Study
委員 Member	村上 哲明 Dr. Noriaki Murakami	植物分類学 Systematic Botany	首都大学東京大学院理工学研究科 教授 Professor, Graduate School of Science and Engineering, Tokyo Metropolitan University
委員 Member	村田 佳壽子 Ms. Kazuko Murata	環境ジャーナリスト Environmental Journalist	ワールドウォッチ研究所 日本副代表 Executive Vice President, Worldwatch Institute Japan Inc.